

「水害」と「シーボルト」と「法人化」：公開事業を中心として

片山 淳、深川 光郎

一 はじめに

私達が九州大学附属図書館に勤めた（戻った）のは、平成15年4月1日からでした。思えば早いもので1年と9ヶ月が経過しました。国立大学にとって最大の改革といえる法人化を挟んだこの2年ほどは、私達の図書館人生にとっても大きな意味を持ちそうです。

今回、九州地区大学図書館協議会誌の紙面をお借りして、「水害とシーボルトと法人化：公開事業を中心として」というタイトルでレポートを書かせていただくことにしたのは、九州大学附属図書館での1年9ヶ月の間で、法人化を経験した国立大学附属図書館の一つのあり方が紹介できればという意味合いからです。

タイトルに含めた「水害」と「シーボルト」は平成15年度と16年度に実施した二つの展示会のキーワードです。そして、その間に「法人化」という名の大学改革があったという意味で、この報告のタイトルとしました。

二 昭和28年西日本大水害写真・資料展

1. 外部資金獲得のためのプロジェクト

九州大学に来て最初の仕事は外部資金獲得のためのプロジェクト企画でした。折から、5月11日の開学記念日に合わせて、展示会「昭和28年西日本大水害写真・資料展」の企画が進められており、これを九州大学附属図書館だけで終わらせずに、防災意識の普及を図るという観点から県内の都市に巡回させる試みをするために、財団法人国土地理協会に申請して研究助成を依頼しました。

2. 昭和28年西日本大水害写真・資料展

最初に、展示会開催後に書き連ねた九州大学附属図書館職員の大先輩岩猿敏生先生に事後承諾を得るために宛てた手紙で書いた主旨・概要を説明した一文を引きながら紹介します。

『昭和28（1953）年の西日本大水害から丁

度50年が経過しようとしています。6月24日の夜半から雨が降り出して翌25日に大水害を引き起こすことになった由、まもなく50年目の記念日にあたろうとしております。

九州大学附属図書館の今年度の展覧は、5月11日の大学開学記念日をはさんだ5月9日～18日までの10日間、中央図書館二階を会場に第44回展覧「昭和28年大水害写真・資料展：水・川・家・人の記憶」をテーマに開催いたしました。

10日の土曜日には、当時西日本新聞社の記者で水害の様子を写真に収めたという貴重な経験をお持ちの江頭光氏と、九州大学西部地区災害資料センターの橋本晴行助教授に展示会開催記念の講演をしていただきました。講演は、情報基盤センターの協力でインターネットにも同時放映されました。

展示は6つの地区（北九州・遠賀・筑豊、福岡、筑後、大分・日田、佐賀、熊本）に分け、被害状況を表す写真を選び、キャプション、場所・撮影日、撮影者名を付けて出しました。写真400枚程度でした。また、同時に、水害による被害状況を示す統計数字やグラフを作成し、新聞記事や参考文献など関連資料とともに展示し、わかりやすいものにしました。

資料内容を調査する中で、この大水害コレクション収集の経緯を示す資料として、「水害総合調査研究資料蒐集記録」というタイトルで、縦書きの野紙15枚に、7月30日から翌年6月3日までの約1年間の資料蒐集の経緯が記録されていました。その中には「岩猿司書官」、あるいは「岩猿」という記名がありました。また、これとは別に、アメリカ総領事館に宛てた、米国の新聞記事蒐集のお礼を述べた手紙（礼状）にも岩猿先生の名前が記されたものがありましたので、ともに当時の資料蒐集の努力を示す資料として展示しました。事後の報告となりましたが、先生の時代

に水害写真を収集したものが、このような形で甦ったことを報告するとともに、先輩諸氏の努力に対してお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。』

3. 福岡・佐賀・大分への巡回展示

展示会は10日間で展覧者は約450名でした。10時から17時までで1時間あたり6～7名の入場者ということになりますが、反響は大きく、国や県や市の防災関係機関等から、資料の借用・掲載依頼があり結構な数に上りました。新聞等にも取り上げられ、西日本新聞社からの紹介もあり、特定非営利活動法人筑後川流域連携倶楽部との共催等により、7月から10月にかけて以下の6都市で水害写真展・シンポジウムを開催しました。

久留米市 7月15日～21日

会場（筑後川発見館くるめハウス）

入場者 約1,402名

日田市 7月27日～8月3日

会場（三隈川交流センター 朝霧の館）

719名

大川市 8月18日～25日

会場（はなむね）

392名

鳥栖市 8月25日～31日

会場（鳥栖市中央公民館）

594名

福岡市 8月29日～9月2日

会場（天神ソラリアゼファー）

不特定多数

鳥栖市におけるシンポジウムで「筑後川大水害展」10月2日 213名

計 6都市（福岡県・佐賀県・大分県）

入場者総数 3,320+α

4. 電子展示

計画には当初から電子版の展示を開催することがありました。そのために写真の著作権者である新聞社等と折衝する必要がありました。4月に各新聞社をまわり、展示会開催の挨拶をし、写真の使用許諾を得ましたが、その際、電子版展示とアウトリーチの企画での利用計画があることを話して了解を求め、この時点で了解はされていたのですが、書類で

交わしたわけではなく、電子版展示でインターネットに公開するに際しては、再度交渉が必要となりました。

ホームページの案は7月の時点で一応骨格は完成していたのですが、公開利用のための許諾にはかなりの困難があると予想されました。そこで、インターネットに公開する画像は、解像度を荒くすること、また写真はPDF化してダウンロードや複写ができないようにすること、そして新聞社から購入なり寄贈なりで入手したものは所蔵権は九州大学に所属するが著作権という点からすれば新聞社の了解が必要なので、写真を新聞社ごとにCD-ROM化して提供することで何とか了解を取り付けることができるのではないかと考え、その方向で交渉しました。その結果、許諾までにかかなりの時間を要したものの話がつき、県庁・市役所・個人の許諾：（平成15年5月）、西日本新聞社（平成15年10月14日）、読売新聞社（平成15年12月3日）、毎日新聞社（平成16年1月19日）、朝日新聞社（平成16年1月19日）と許諾が得られ、平成16年2月5日より附属図書館ホームページからの公開（URLは<http://minerva.lib.kyushu-u.ac.jp/suigai/>）を開始しました。

附属図書館HPのトップページと電子展示との関係という面では、トップページに電子展示という表示を出し、トップページのニュースに通知文を流し、そこからリンクさせることとしました。たくさんある電子展示の中で、水害展のトップページは、「実際の展示会の開催期間」、「凡例」、「展示リストおよび解説」、「開催者」、「共催機関としての写真提供機関や助成金提供機関」、「著作権や他からのリンクの窓」などを設けました。「凡例」には、以下のような内容を含ませました。

- ・この展示は、昭和28年西日本大水害写真・資料展「水・川・家・人の記憶：西日本大水害から50年、災害を忘れないために」を電子的な形で再構成したもの
- ・展示した写真は、九州大学附属図書館の特殊コレクション「水害資料」の資料
- ・写真は、大水害直後から収集し、各新聞社・県庁・市役所等から購入したか寄贈を受けたもの

- ・写真の電子化に際しては、各新聞社・県庁・市役所等の了解を得ている
- ・出陳した写真の中で、個人が特定できるようなもの、あまりに悲惨なもの等は除外した
- ・(財)国土地理協会からこの電子展示にかかる一部について経済的な支援を得ている
- ・これらの写真は、資料の性格上ダウンロードや印刷を禁止する

この企画の財政基盤は国土地理協会から防災教育の普及活動に対する支援として得られた特別助成金です。いずれにしても、特殊コレクション「水害写真資料」があればこそ生まれた企画でした。収集・整理を進めた先輩諸氏、今回の企画に積極的に参加した現役の図書館職員の努力に感謝です。

三 大学の社会貢献事業としてのシーボルト展

1. シーボルト『NIPPON』再発見

「どなたもご存知のシーボルトがなぜ九州大学の展示会のタイトルか？」については、医学分館の書庫の中からシーボルト『NIPPON』(1823-1851)初版本の未製本版が見つげ出されたことが契機になっています。その経緯については、広報誌「図書館情報」(38巻3号2003年3月)に記述されています。古医書の展示会を開催するために、医学分館の貴重書庫で作業をしていたところ、この積み上げてあるばらばらのものは何だろうということから、専門の先生に見ていただくとシーボルトの刊行した『NIPPON』だったという訳です。再発見でした。

2. 「シーボルトが観た日本」展

開学記念展示会として取り上げた「シーボルトが観た日本」展は、5月9日から18日までの10日間、附属図書館および医学分館(10日から15日)で開催しました。期間中の5月15日(土)には、次の二つタイトルの関連講演会を開催しましたが、この時の入場者は105名で会場が一杯になるほどの盛況を呈しました。

宮坂 正英(長崎純心女子大学教授)氏
「日本情報編集者としてのシーボルト」

宮崎 克則(九州大学総合博物館助教授)氏

「再発見!シーボルト『NIPPON』」

一方、3月に県立図書館と九州大学附属図書館医学分館に所蔵する「NIPPON」初版本を比較した記事が西日本新聞に掲載された(3月18日付西日本新聞夕刊)こともあり、話題性ができ、新聞やテレビが積極的に取り上げてくれたために前評判は上々と言う感じもありました。

社会連携ということからすると、3月26日に福岡県立図書館と九州大学附属図書館は相互協力協定を締結して、資料配送システムに支えられた新たな市民へのサービスの展開を図りました。後にわかることですが、この二つの出来事が、新たな展示会への伏線となったこととなります。

展示会開催期間中に来館した人は約640名(医学分館はこれとは別に約180名)でした。昨年話題をとった水害展と比較して見ると約1.42倍という数字でした。来館者のアンケート結果を「図書館情報」(40巻1号2004年7月p.8-9)に掲載していますが、以前から交通の便の良い都心で開催して欲しいという根強い要望がありました。

3. 社会連携事業:アクロス福岡での展示会へ

展示会に対する意見の中には、福岡県立図書館との間で、新聞で話題になった『NIPPON』初版本を比較した展示や、『植物誌』や『動物誌』も見たいという市民の声もありました。これに応えようという話が出て、交通の便の良い市の中心部天神で共同展示会を開催することへと話は展開しました。6月に第1回の実行委員会を開催し準備が始まりました。双方で館内にWGを設置して作業を進めることとし、一方で会場探しをして、福岡県の財団法人であるアクロス福岡を会場に展示会と関連講演会を開催すること、2月8日から13日という日程が確保できたのが8月のことでした。

一方、計画の具体化に合わせて、九州大学としての社会連携事業計画の募集があり、県立図書館との共同事業としてアクロス福岡

(都心)での展示会「シーボルトがみた日本」開催で応募したところ、財政的な支援が得られることが10月に決定しました。

県立図書館との打合せを続ける中では、10月末から11月にかけて「とびうめ国文祭」が開催されるということもあり、国文祭に連携して双方で展示会を企画することし、県立図書館は10月20日から「シーボルトと福岡」と題した展示会を、九州大学附属図書館は11月1日から県立図書館に連携して常設展示「シーボルト『NIPPON』の源泉を少し」を開催しました。

そして、現在は平成17年1月です。展示会まで残すところ1ヶ月となり、準備に追われています。ポスターができあがり、チラシもまもなく完成というところです。会場で配布するカタログも内容がほぼ固まり、原稿を印刷業者に渡すところまで漕ぎ着けています。職員のWGで展示の内容を分担して作成してきました。本館と医学分館の若手職員8名が中心となって、情報サービス課の掛長諸氏も入って準備を進めてくれています。

別に、展示会に協力をいただいている機関として、シーボルト記念館や長崎大学附属図書館、そして学内からは韓国研究センターが協力をしてくださることになっておりますし、シーボルトの生まれ故郷(ヴェルツブルク)にあるシーボルト協会・シーボルト館にも協力要請を行い、資料の利用等で協力が得られることになりました。

一方、2月8日から13日までの期間で、シーボルトに関連するテーマでの講演会として、展示会場の横にあるアクロス福岡二階研修室を会場に以下の二つの企画が準備できました。

1. 2月9日(火)14時～ 谷口治達 九州造形短期大学学長 「シーボルトと絵師たち」
2. 2月13日(土)14時～ Wolfgang Michel 九州大学言語文化研究院教授 「シーボルトの日本観—日本のシーボ

ルト観」

広報面では、記者会見を開いて情報を流し、話題づくりに力を注ぐとともに、これも3月からスタートした福岡県内図書館協議会組織のそれぞれのネットワークも活用して、公共図書館・専門図書館・学校図書館・大学図書館へのPRも実施する予定です。また、インターネット上でも様々なPRを行いますし、アクロス福岡のイベントとしてのPRも積極的に取り組んでいただいています。地下鉄の駅や地域の自治会や会場近くでのチラシの配布などにも取り組む予定です。

もう一つ重要なことがあります。それは、法人化して新たなビジネス・モデルを作ろうという企画です。これについては現段階では形をなしておらず検討中ですので、展開として別の機会に報告させていただきたいと思っています。

四. さいごに

さて、以上のように、平成15～16年度に取り組んだ展示会の開催における九州大学の特徴について紹介してきました。法人化になって何が影響したかという面を考察して、まとめしたいと思います。以下の4点が重要だと考えます。

- ① 事業ですから財政的な基盤の確保が重要だということ
- ② 大学の社会貢献(連携)事業としての位置づけが明確になっていること
- ③ 図書館職員が専門職としての意識を持って積極的に取り組める環境を作ること
- ④ 広報をしっかりと行い明確な意図と目標をもって取り組むこと

来年度のこの機関誌には、これらの活動の実施報告とともに、更なる活動の展開が報告できることを期して遅筆を置きます。

(平成17年1月7日)

かたやま あつし、ふかがわ みつろう
(九州大学附属図書館)